
「復興と芸術」 3

— 石巻リボーンアート・フェスティバル

野々村文宏

— 要旨

東日本大震災で甚大な被害を受けた石巻市と牡鹿半島の広域で、再生を掲げたアートフェスティバルが開かれた。「音楽」と「食」と「美術」のクロスオーバーする脱領域的な試みは、震災、とりわけ津波の記憶と鎮魂、牡鹿半島にもともとあった豊かな自然との共生の意味を再び問いかけるかたちとなった。

宮城県石巻市は2019年10月現在人口約14万3千人と宮城県で仙台市に次いで第2の規模を誇りながら、東日本大震災の際の津波の被害者が多かった地域として知られる。というのも、旧北上川が市内を南北に縦断し仙台湾の支湾である石巻湾に注ぐため、川の流域や河口付近はとくに海拔が低く、津波の被害が甚大になりやすい地形だったからである。また、全国第3位の水揚量を誇る石巻漁港と周辺の海産物加工場、工業港である石巻港も沿岸部であったため大きな被害を被った。石巻市の東日本大震災での死者は、直接死3,278人／間接死274人／行方不明者425人と、実に4000人以上で、その多くが津波の犠牲者である。津波犠牲者の数は全国市町村でいちばん多い。

その石巻市が、石巻市街地と牡鹿半島^{おしか}でアートイベントを開催した。その名も、再生／生まれ変わりを意味する reborn をつけた、Reborn-Art Festival、リボーンアート・フェスティバルという。第1回が、2017年7月22日から9月10日まで51日間ひらかれ、主宰者発表で延べ26万人が参加した。2018年夏のプレイベントをはさんで、第2回が2019年8月3日から9月29日までの58日間ひらかれた。

このリボーンアート・フェスティバルの特徴は大きく言ってふたつある。

- (1) 広域であること
- (2) 「音楽」と「食」と「美術」の三領域にまたがる、または交わる総合芸術祭であること

- (1) は、第1回、第2回ともに石巻市街地ばかりでなく牡鹿半島の数カ所を展示エリア

とし、また、さらに第2回は離島である網地島^{あじしま}も展示エリアとした。後述するが、この広域性が、私もふくめたビジターやいわゆる「アート・ツーリスト」に一面的な観光以上の重層的な体験をさせることに成功していると思う。これは、東日本大震災の被災エリアが広域であること、とりわけ牡鹿半島南東端から近い金華山沖が大地震の震源地であったことに加えて、石巻市が2005年にいわゆる「平成の大合併」で周辺の市町村を吸収して、隣接する桃生郡のいくつかの町や、女川町をのぞく牡鹿半島が石巻市となり、広域ながら同一自治体のために展開がやりやすかったためと思われる。

(2) は、「音楽」の要素としては、音楽プロデューサーの小林武史の人脈から多くの有名なミュージシャンが参加したこと。また、小林らが設立した、音楽人を中心とした一般社団法人 AP バンク (ap bank) が出資していること。そのため大小の音楽ライブが頻繁に開かれていたこと。また「食」の要素は、三陸沖は暖流と寒流がぶつかる好漁場で魚種が豊富で、かつ牡鹿半島の野山には名のとおり野生の鹿が棲息するなど食材に恵まれていたこと、そしてなかでも牡鹿半島のほぼ南端の鮎川地区 (旧鮎川町) はかつて鯨漁が盛んな町であったことなどに関係している。地域おこしに、アートフェスティバルと一次産品の製品化の競演は他にも例があるが、リボンアート・フェスティバルでは日本の伝統的な鯨漁と鹿猟が参加作品と展示に強い影響を与えていて、それがこのフェスの際立った独自性を生み出している。とりわけ第2回のテーマが「いのちのてざわり」となったことで、このことが前面に押し出された。

この、いわばキックスタートとして、2015年に石巻市と ap bank が設立発起人となり「Reborn-Art Festival 実行委員会」が立ち上げられ、実行委員長に亀山鉦石巻市長と一般社団法人 ap bank 代表理事の小林武史が就任した。ap bank とは、将来の「持続可能な社会」を創るために、2003年に、小林武史、音楽バンド Mr.Children の櫻井和寿、坂本龍一の3人の音楽人が拠出した資金をもとに発足した法人である。発足当初は環境ビジネスへの資金融資を目的としていたが、2011年3月以降はおもに震災にあった東北地方の復興に関係する事業に力を入れている。会期中、ap bank の主催する音楽コンサートが行われ、その動員力と影響力はとても大きかった。なので、全体像としては、リボンアート・フェスティバルは、アート単体のフェスティバルと言うよりも、いわゆる J-POP と呼ばれるポピュラー音楽と食を大きくふくんだ総合芸術祭ととらえるべきだろう。

2017年の第1回は、実行委員に人類学者の中沢新一ら、キュレーション全体を見渡すキュレトリアル・リーダーにワタリウム美術館の和多利恵津子／和多利浩一、またフードディレクターに目黒浩敬を迎えて、石巻市街地中心エリア、石巻市周辺エリア、牡鹿半島中部エリア、牡鹿半島先端・鮎川エリアの4つのエリアで展開された。

2019年の第2回は、より細分化された7か所の展示エリアごとにそれぞれ異なるキュレーターを立てるマルチキュレーター制を取った。中沢新一 (石巻駅前エリア)、有馬かお

る（市街地エリア）、名和晃平（荻浜エリア）、島袋道浩（鮎川エリア）、豊嶋秀樹（小積エリア）、小林武史（桃浦エリア）、和多利恵津子／和多利浩一（網地島エリア）である。

そもそも、牡鹿半島というぐらいで、野生の「鹿」は人々の営みのかたわらにいる。2017年の第1回のときに、荻浜のエリアに設置された名和晃平の大きなモニュメント「White Deer (Oshika)」が作られている。これはポスターなど広報にもっとも多く使われた作品で、リボンアートのモニュメントでありアイコンである。もともとインターネット上で拾った鹿の剥製のデータから作られたコンセプチュアルな作品でもあるが、しかし、その説明無しではわからない、伝わりづらいものでもあり、そこが、光や泡といった不定形の素材や純粹知覚や現象を「立体作品」として提示する名和の作家としての特徴をよく表しているとは言いづらかった。ところが今回はこの White Deer を取り囲む荻浜エリアの作品を名和自身がキュレートすることで、第1回のときに私が感じていたわずかな不満が解消されていた。まず、名和の White Deer のすぐそばに、太陽光とその軌跡を使った野村仁の作品「Analemma - Slit : The Sun, Ishinomaki」が設置されていることが大きい。1945年生まれの野村仁もまた光や天体や時間を軌跡として記録し展示するコンセプチュアルな作

図1 第1回『Reborn-Art Festival』（2017）エリア図



家であり、1975年生まれの名和にとっては、作風の親近性から、いわば叔父のような作家と位置づけることもできる。そして、すぐそばには太平洋戦争末期に日本軍が魚雷を格納していた現在は使われていない洞窟が存在し、この3つの洞窟に、それぞれ名和の「Flame」、WOWの「Emerge」、村瀬恭子の「かなたのうみ」という作品が展示された。よく、洞窟についてはプラトンの著書『国家』を引き合いに出されるが、それはもちろん隠喩であり、実際の洞窟にプロジェクターで映像を流したりなにかの像を浮かび上がらせる展示を私はここで初めて見た。そして、この試みがホワイトキューブ批判となっているところが評価できる。また、萩浜はもともと牡蛎やホヤやアナゴの漁港で、震災後、幹線道路である県道2号牡鹿石巻鮎川線沿いに「牡鹿ビレッジ」という名の多目的休憩所が作られて整備されてきた。ここにある、地の素材を使った食堂「はまさいさい」から、漁港を通じて海沿いの道を辿ってWhite Deerに辿りつくくと、さらにそのすぐ奥にリボーンのゲスト・シェフが料理をふるまうレストランReborn-Art Dinningがあり、鹿のモニュメントや数々の料理をビジターがスマホで写真を撮ってSNSにアップするのに好適なもともと観光的な場所となっていた。

2017年の第1回で、鹿は、牡鹿半島先端・鮎川エリアの県道220号線コバルトラインの地藏山悟峯寺の岩井優の作品「ダンパリウム」にも現れた。岩井の作品は、大中小3つのジオデシック・ドームに、震災と津波によって投棄されたさまざまなものをくくりつけるものである。そのなかに、使われなくなった家電類とともに、鹿の皮や骨までがふくまれていたのである。この作品は多少の物議を醸し出した。鹿は、増え過ぎた牡鹿半島では害獣として駆除の対象になる獣であるが、海を渡った金華山では神に仕える神聖な獣となっているからだ。

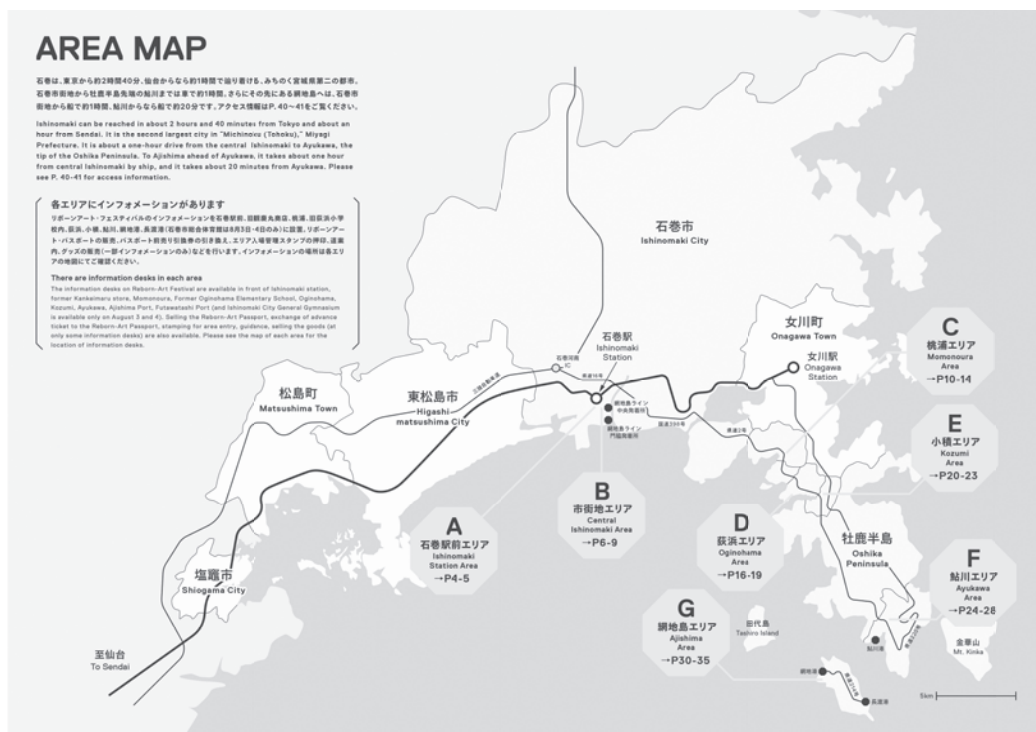
2019年の第2回では、牡鹿半島のおおよそ中央に位置する小積エリアが、クリエイター豊嶋秀樹のキュレーションのもと、「鹿に導かれ、私たちを見るとき」というエリアテーマで、鹿と狩り、鹿肉の食、鹿と自然と人間の関係を正面から扱うものとなった。増え過ぎた鹿の獣害に悩む牡鹿半島に2017年に作られた鹿肉解体処理施設「FERMENTO（フェルメント）」で、猟師が鹿を仕留め解体処理し食肉にするまでの営みじたいを会期中、公開し、さらにその周囲に仮設のプレハブ小屋を複数建て、アーティストの絵画や写真やパフォーマンス作品を展示した。「FERMENTO」にはほぼ常駐する地元・石巻生まれの食猟師の小野寺望は、罠で鹿を獲るのではなく猟銃で撃ち、細やかな注意を払い最適の状態に鹿肉を取り分けて出荷するので多くの有名料理人から支持と信頼を得ている。その小野寺の狩りと解体の営みを、写真家の在本彌生が撮影して「FERMENTO」に展示する。

「FERMENTO」には小野寺の猟に随行する猟犬の松吉姐さん（雌犬）も常在して訪問者に愛嬌をふりまく。週末には、何回か、実際に鹿を解体し調理してふるまう食のワークショップも開かれた。この施設の周辺に4つのプレハブが建てられ作品の展示スペースとなっている。また、東北在住の写真家志賀理江子は自身の写真作品の展示ではなく、緩やか

な斜面の林に海から運んだ白い牡蛎殻を敷き詰め、朽ち木の幹にひとつ穴を空け、「Post Humanism Stress Disorder」(PHSD、PTSDを連想させる)というタイトルのインスタレーションとして提示した。ひとつの幹に空いた丸い穴は貫通する銃弾を想定させると同時に、志賀が写真家であるところから、レンズと被写体のあいだに引かれた架空の線と望遠レンズを通して見た視界を連想させる。

第2回で島袋道浩がキュレーションする鮎川エリアは牡鹿半島でもっとも南端に近いエリアである。このエリアは、旧・鮎川町で、古くから捕鯨の町として知られていた。島袋道浩は2017年の第1回のときに、このエリアのビーチ、のり浜に「起こす」という作品を展示した。砂を掘って、砂浜に流木を起こす(=立てる)、しかし荒天であつたり大潮の日になると、起こしたはずの流木はまた海の波によって崩され、または流されるのである。それを鑑賞者がまた「起こす」。ただそれだけであり、モニュメントとしての長期保存性は無い。ただし同時に環境への負荷も皆無に等しい。一般道路からこの浜までの下り坂道は急峻で長く、浜まで降りていくその手続きに強い儀式性が感じられる。現地で調達できる自然の素材を使って環境に負荷をかけない点ではイギリスのアンディ・ゴールズワージーの作風を連想させるが、しかし、島袋の作品にはなにより、石巻と牡鹿半島が負った津波

図2 第2回『Reborn-Art Festival』(2019)エリア図



https://www.reborn-art-fes.jp/wp/wp-content/uploads/2019/09/RAF2019_GUIDEBOOK_0904.pdf より

の痛々しい記憶を蘇えらせ、大きく言えば地震国である日本の永劫にわたる繰り返しをも暗喩させていて、倒されても流されてもまた流木を「起こす」ところに「再生」(Reborn)への意志と希望を感じさせ、なによりビジターが単なる鑑賞者の位置から行為者になる能動的な転換を与えている。また、島袋道浩は、御番所公園にある仙台藩唐船番所に、「起きる」というタイトルで植木鉢を寝かした状態で育てた樹木を展示した。発芽した樹木は重力に逆らい、天——太陽の方向に向かって伸びていく。横倒しになった鉢から90度に曲がり上に伸びていく樹木という植物の自律的な生育の力を隠喩的に使った作品だった。「起きる」は、のり浜の「起こす」と対になる作品で、第1回が終わってその年の10月から東京・神宮前のワタリウム美術館で東京展(Reborn-Art Festival TOKYO)でも展示された。

2019年の第2回、鮎川エリアのキュレーションを任された島袋は、今では使われていない鮎川集会所の屋上に、「鮎川の土一起きる／鮎川集会所」として、ほとんど野生状態のような雑草を展示する。この作品は2017年との連続性を知らなければ、ややわかりづらいかもかもしれない。しかしまた、島袋は、「白い道」というタイトルで、白い敷石の敷き詰められた長い下り坂を降りていくと、いきなり視界が開け金華山が見える——金華山沖が東日本大震災の震源であり、地震発生直後、津波の引き波で金華山と牡鹿半島のあいだの海底が見えた、という、出来事の現場へとビジターをいざなう⁽¹⁾。

第1回の「起こす」も第2回の「白い道」も、下っていく長い階段の坂道という仕掛けが儀式性を生み出している。この鮎川エリアで写真家の石川竜一は、コバルト荘跡地という、第1回は宮島達男の「時の海」というLEDを使ったモニュメンタルな作品が設置された場所で、何か今まで誰もやったことのないものを、というキュレーター島袋の要請に答えて、「掘削」というただ地面を掘るだけの作品を作る。最初は手でスコップで掘ろうとしたところ、そこはもともと企業の休養所が建っていた土地で、コンクリート混じりの土は硬くて人力では掘りきれず、写真家自らが免許を取得してパワーショベルで地面を掘った、その現場が作品である。純粹な行為としての還元性を突き詰めていくと、それがアートなのか日常的なあるいは社会的な所作なのか差異が無くなっていく。が、それは復興の隠喩として強い印象を鑑賞者に与える。

この鮎川エリアには、詩人の吉増剛造が会期中常駐して、ビジターや地元の人と交流し制作を行う「詩人の家」というプロジェクトもある。わかりやすいモニュメンタルなものは少ないが、コンセプチュアル・アーティストとして行為を作品にしたり観客を参加者に変える島袋道浩の特徴が良く出ているエリアだ。

鮎川についてももう少し述べよう。もともと三陸沿岸はマッコウ鯨の好漁場だった。1906(明治39)年に東洋漁業が鮎川を基地として大型沿岸砲殺捕鯨を始め、ほかの漁業会社も相次いで進出し、1910(明治43)年から1948(昭和23)年にかけて国内随一の漁獲数を誇った。鮎川を基地とするミンク鯨を主対象とした小型沿岸砲殺捕鯨は1933(昭和8)年から始まり、槌鯨やゴンドウ鯨に対象を変えて、昨年まで調査捕鯨として、そして今年からは商業捕鯨が復活して現在に続いている⁽²⁾。

なぜ鮎川港が捕鯨基地に選ばれたかという、捕った鯨の解体は肉の劣化や腐敗を避けるためなるべく早く行わなければならない、鮎川港は漁場である金華山沖に近かったからである。1906（明治39）年の東洋漁業の鮎川進出から5年後の1911（明治44）年には牡鹿半島には9社もの捕鯨会社が進出し、その盛況ぶりは、鯨を曳いて入港するときに捕鯨会社ごとに汽笛の鳴らし方を変えて混乱を避けなければならなかったほどだった。また、1933（昭和8）年に小型のミンク鯨が捕れることがわかったと、鮎川の猟師たちはこぞって「ミンク船」と呼ばれる小型捕鯨船を造船して鯨漁に出た。鮎川の町は鯨で富み、一時は、町民税不要の話も出るほどの県内随一の豊かな町となったこともある⁽³⁾。

東日本大震災では、鮎川の観光施設「おしかホエールランド」も被災した。マグニチュード9.1のパワーによりこの付近の土地は1m前後も沈下し、ランドマークであるファサードも水没した。しかし、来年2020年には新施設として再興され、公開を再開する予定である。そして、「おしかのれん街」、2011年11月に鮎川の復興を願って建てられた仮設プレハブ商店街には、復興の希望として新聞やテレビなどによく紹介された、Yotta（ヨタ）の作った「くじらのカーニバル」という、くじらを模したねぶたが飾られている。この「おしかのれん街」も、2020年には「おしかホエールランド」をふくむ新複合施設に店舗を移転するため、現在のプレハブ店舗は撤去される予定だ。

小林武史がキュレーションする^{もものうら}桃浦エリアでは、SIDE COREの「壁の美術館」MoWA=Museum of Wall Artが特徴的だった。石巻のみならず、震災後、東北地方の太平洋沿岸は防潮堤の建設がさかんである。が、防潮堤は視界を遮るために住民が慣れ親しんだ美しい海岸の風景を見えなくしてしまう。津波がいつ、どの高さで来るか確率論的安全を測るか、それとも日常の景観を優先するか、どう議論しても二者択一の答えは出ない。そこで、SIDE COREは、既に桃浦に建てられている防潮堤に隣接させるかたちで、仮設の「壁の美術館」を作った。現代都市文化や公共性とストリート・アートを組み合わせて提案する作風のSIDE COREは、この仮設美術館にBIEN、EVERYDAY HOLIDAY SQUAD、リヴァ・クリストフ、森山泰地のグラフィティ・アートや映像を展示し、現代の都市の壁に描かれたストリート・カルチャーを体現する。まさに壁について壁が語る自己言及性が批評的である。はたして、今はまあたらしい防潮堤に何者かの手によってグラフィティが描かれる事はあるのだろうか？ もし将来、そんな日が来たとしたら、このMoWAはなんともし予言的な試みだったと評価されるだろう。

SIDE COREは2017年の第1回に石巻市周辺エリアの魚町と呼ばれる地区の倉庫街にある元スケートボード場に「rode work」という作品名で、映像をふくめた大掛かりなインスタレーションを作った。そもそもここは石巻魚市場に近い低地で、もともとは魚の冷凍保存倉庫だったのがスケートボード場OneParkになったという経緯がある。そこで震災後、周辺もふくめて津波に破壊されて使われなくなった元スケートボード場に脚光を当て展示の場に組み立て直す。そこには、スケートボードやグラフィティなど現代若者文化やスト

リートと公共性の関係への言及がある。このときにも、防潮堤と難破した廃船を組み合わせたインスタレーションがあり、SIDE CORE の発想には連続性がある。

また、桃浦エリアでは、プロジェクト FUKUSHIMA！や札幌国際芸術祭などで聞き取り調査にもとづく作品を作る中崎透が、Peach Beach, Summer School と題して、廃校となった旧荻浜小学校の2階フロアを中心に、現地の人々の思い出を聞き取り調査してナラティブ・アプローチのインスタレーションに仕上げている。さらに中崎は、「夜側のできごと」と題して、同小学校にひと晩泊まり込み、周辺や近隣の海岸を散歩するなどの体験型ナイト・イベントを数回、実施している。旧荻浜小学校には、ロンドン五輪のモニュメントを担当した世界的スター作家のイギリスのアニッシュ・カプーアの作品も展示しており、他の作家と変らないそのさりげない展示が、逆に、訪れたアート・プロパーたちを驚かせた。

網地島エリアの^{あじしま}網地島は、石巻から「網地島ライン」という離島フェリーで約1時間の面積6.45平方キロの島で、現在の住民は最盛期の1/10の約300人である。震源地である金華山にもっとも近いこの島は、東日本大震災時には深度6弱の地震と津波を食らい、沿岸部の漁業施設は壊滅的打撃を食らったがさいわいにして死者は出なかった。津波の前兆の引き波を見た住人が島民全員を高い場所に避難誘導したからだという。しかし直後の通信が本土と途切れたため、1週間ほど島民の生死が心配されていた島でもある。網地島のキュレーションは、第1回から全面的に参加しているワタリウム美術館の和多利恵津子／和多利浩一が行い、網地島はワタリウム美術館で展示したことがある、関係が深いアーティストの島となった。震災直後、沿岸の漁業施設が壊れたことから、ただでさえ人口の減り続けていた網地島は、漁業に見切りをつけての就労年齢の離島者があい継ぎ、高齢化に拍車がかかった。とは言え、離島はもちろんのこと地方の人口の高齢化は、日本社会が全体で抱えている問題である。若者に島に来てもらうため、島民たちに、リボンアートに会場を提供しようと働きかけた網地島生まれ網地島育ちの74歳の女性の話は「島に生きる～キナ子さんの夏物語～」(東北放送制作、民間放送教育協会、テレビ朝日系放映)というテレビ・ドキュメンタリーとして放映された。網地島は細長く、網地港と^{ふたわたし}長渡港の2つの港があるが、長渡港の側の山の斜面の岩肌には、まるで鑑賞者をお出迎えするように、現代美術家でもあり別名でストリートのグラフィティ・アーティストとしても活躍するバリー・マッギーの布地プリント作品が約100mも貼られている。網地島では、太平洋と金華山をのぞむ海岸の高台に設置された、梅田哲也のドーム型の半地下壕「針の目」というインスタレーションが、水琴窟とピンホールカメラを組み合わせた繊細な作品で、半地下の世界と外の眼下の太平洋の波しぶきが強烈な対照をなしていた。

有馬かおるがキュレーションした石巻市街エリアでは、第1回リボンアートの後に有馬が開設した4つのギャラリーの集合体であるアートスペース「石巻のキワマリ荘」のメンバー、全員石巻市在住の作家、が展開したり、また漫画家石ノ森章太郎の登場キャラク

ターの像が立ち並ぶ通称マンガ・ロードにひっかけてアート・ロードを名乗ったりもした。石巻や宮城県のアイデンティティだけではなく、より広汎に、山形県にある東北芸工大と山形ビエンナーレ、山形藝術界限とも連携を持ち、山形藝術界限のメンバーの作品も展示している。また、このエリアは2017年の第1回に、津波で浸水した映画館、日活パール座を使って、ハスラー・アキラとカオス・ラウンジが展示をした。このパール座は、幕末の芝居小屋から始まって永いあいだ、石巻市の娯楽のための空間として機能し続け、津波による浸水で大小ふたつの劇場のうち大きいほうの「シネマ1」は喪失したものの、震災から一週間後に「シネマ2」は上演を再開したという不屈の意志の象徴のような存在である。

石巻駅前エリアでは、中沢新一キュレーションによる、いわばリボーンアート・フェスティバル全体のテーマ展示が、シンガポール在住のアーティスト、ザイ・クーニンらの手によってパネル展示の手法で行われた。これは、石巻地方を、東北のあるいは日本の一部として捉えるのみならず、三陸沖の黒潮の流れに沿った大きな視点から捉えようとする、スケールの大きなパネル展示でありビジョンの提示だった。

このように、石巻で開かれているリボーンアート・フェスティバルは、東北であることの地方性地域性を強く意識しつつ、死者への鎮魂と復興を願い、狭義での「現代アート」の祭典ではなく、広く、音楽と食文化を包含するかたちで石巻市・牡鹿半島の独自性の確立を目指していて、日本で最近、増えている地域アートフェスティバル、大型野外展のなかでも個性を発揮している。このまま開催を続け、将来にわたり、記憶の場・鎮魂の場・復興の場・交流の場として成長して欲しいと願う。

—— 参照・引用文献

2017年第1回リボーンアート・フェスティバルの公式データ、表記などについては、以下を参照。

『Reborn Art Festival 公式ガイドブック 2017——アート・音楽・食の総合祭』スターツ出版、2017年。

『リボーンアート・フェスティバル公式記録集』和多利浩一ほか編、アートダイバー、2019年。

2019年第2回リボーンアート・フェスティバルの公式データ、表記については、公式記録集などがまだ出版されていないため、主に、WEBサイト <https://www.reborn-art-fes.jp> を参照した。

—— 注

- (1) 2017年に筆者が泊まった鮎川の「ホテル・ニューさか井」で支配人から聞き取った話。同ホテルには、地元のアマチュア・カメラマンが偶然、撮影した、金華山と牡鹿半島の海が引き潮で割れ、海の底が露呈していく写真が展示されている。また、石巻地方で被災した100人の証言集、『津波からの生還』三陸河北新報社『石巻かほく』編集局・編、旬報社、2012年、の237頁にも、金華山から見た、海が割れて海底が露出するという佐々木透さんの証言がある。
- (2) 『日本捕鯨史【概説】』中園成生、古小鳥舎、2019年、171頁。
- (3) 『クジラと日本人の物語——沿岸捕鯨再考』小島孝夫・編、東京書店、2009年、117-119頁。